罪と罰「7」（ドストエフスキー）

エピローグ

一

シベリア。茫漠たる大河の岸に、ロシアの行政中心の一つとなっている市街がある。街には要塞があり、要塞の中に監獄がある。監獄の中にはもう九か月というもの、第二級徒刑囚ロジオン・ラスコーリニコフが禁錮されていた。彼の犯行の日から、ほとんど一年半の歳月が流れた。

彼の犯罪に関する裁判は大した困難なしに終了した。犯人は事情を紛糾させることもなく、自己を有利にするために事実を曲げたり、状況をやわらげたりすることもなく、いかなる微細な点をも忘れず、きっぱりと正確明瞭に自分の口供を裏書した。彼は殺人の全過程を一分一厘も漏れなく詳述し、殺された老婆の手中に発見された質物（薄い金をはさんだ板切れ）の秘密を明瞭にした。それから殺した老婆の手から鍵を取った模様を詳しく物語り、その鍵の形まで説明し、長持そのものとその内容を説明した。それのみか、中にあった個々の品物さえ二、三点数え上げた。彼はまたリザヴェータ殺害の謎をも解いて聞かせ、コッホが来てドアをたたいたことや、そのあとから大学生がやって来て、二人がかわした話の内容まで物語った。それから犯人の彼が階段を駆けおりて、ミコールカとミーチカのきゃっきゃっという叫び声を聞き、空家のアパートに隠れていて、それから家へ帰った一部始終を述べ、最後にヴォズネセンスキイ通りのとある邸内の門の下に、石材のあることを明示した。はたしてその下からは、贓品や金入れが発見された。一口に言えば、事件は明々白々となったのである。とりわけ予審判事や裁判官たちは、彼が金や物品を使いもせず、石の下に隠していたことに驚いたが、しかしそれにもまして、彼が自分の盗んだ代物の詳細を知らないのみならず、その点数さえ誤っていたことに、深く驚かされたのである。彼が一度も金入れを開かないで、その中に、いくら金がはいっているかさえも知らなかった事実は、ことにありうべからざることに思われた（金入れの中には三百十七ルーブリの紙幣と、二十カペイカ銀貨が三つはいっていた。長い間石の下敷になっていたために、上の方にあった大きい紙幣の二、三枚はひどくいたんでいた）。ほかのことは細大もらさず、進んで正直に白状しているのに、なぜ被告はただこれ一つだけ嘘をつくのか？　この点をつき止めるのに、人々は長いこと苦心した。結局ある人々は（特に心理学者は）、彼がじっさい金入れの中をのぞかなかったこと、したがってその中に何があったか知らないままに、石の下へ隠してしまったということは、ありうべき場合だと承認したが、それと同時に、犯罪そのものもある一時的な精神錯乱によるもので、それ以上なんらの利得を目的とする打算のない、強盗殺人の

病的偏執狂（モノマニア）から生じたので、それ以外の何ものでもないという結論に達した。ちょうどそこへ、今日しばしばある種の犯人に適用しようと努めている、一時的精神錯乱という最新流行の理論が加勢にはせ参じた。なおその上に、ラスコーリニコフの痼疾（こしつ）的なヒポコンデリイ症状が、医師のゾシーモフや、昔の学友や、下宿のおかみや、女中や、その他多くの証人によって、確実に証明された。こうしたすべての事情は、ラスコーリニコフがありふれた殺人犯や、強盗や物とりなどとはまったく似ても似つかぬもので、そこには何かもっと違ったものがある、と論結させる上にあずかって力があった。ただこの意見をとった人々が、この上もなく遺憾に思ったのは、犯人自身がほとんど自己弁護をしようとしなかったことである。いったい何が彼をかって殺人におもむかしたか、また何が彼をかって掠奪（りゃくだつ）を行なわせたか、といういよいよ最後の質問を受けたとき、彼はきっぱりと明瞭に、思い切り乱暴なほど正確な語調で、いっさいの原因は彼の苦しい状態であり、赤貧であり、頼りない境遇であると答え、老婆を殺したら手にはいるものと当てにしていた、少なくも三千ルーブリの金を土台にして、出世の第一歩を確実にしようと望んだのであると言った。彼が殺人を決心したのは、自分の薄志狭量にかてて加えて、窮乏と不遇のためにいらだちやすくなった性格から来たのである。では、自首を決心した動機は何かという尋問に対して、彼は心底からの悔悟だと端的に答えた。これらはすべて、ほとんど乱暴といっていいくらい無造作であった……

とはいえ判決は、人々が犯行から推して期待していたよりは、はるかに寛大なものであった。これはまったく犯人が自己弁護をしようとしなかったばかりか、かえって自分の方から、できるだけ罪を重くしようとする気持を示したからである。そして、この事件の有している奇怪な特殊な点が、ことごとく考量にとり入れられた。犯罪遂行前の犯人の病的な痛ましい心の状態は、いささかも疑いをさしはさまれなかった。彼が贓品を利用しなかった事実は、一部は悔悟の念のきざしてきた影響と、一部は犯行当時の精神能力が十分健全でなかったためと判定された。思いがけなくリザヴェータを殺したことも、かえってこの想定を裏書する実例として役立った。二度まで殺人を行なった人間が、しかもそれと同時に、ドアのあけ放しになっているのを忘れていたのである！　また最後に、意気悄沈（しょうちん）した狂信者ニコライの虚偽の自白があったために、事件が並々ならず紛糾していた上、真犯人に対して明白な証拠どころか、ほとんど嫌疑さえかけられていなかったにもかかわらず（ポルフィーリイは完全に約束を守ったので）、そうした時に自首して出たということ、これらすべてが相寄り相たすけて、いよいよ被告の運命を緩和する助けになったのである。

なおその他にまったく思いがけなく、被告にとって非常に有利な事情が、もう一つ現われたのである。もとの大学生ラズーミヒンが、どこから掘り出したのか、被告ラスコーリニコフが大学在校当時に、なけなしの財布の

底をはたいて、貧しい肺病患者の一学友を補助し、ほとんど半年間も面倒を見てやったという情報をもたらして、有力な証拠を提供したのである。彼はその学友が死んでしまうと、あとにとり残された老衰している亡友の父を世話してやった（この学友はまだ十三になるやならずの時から、自分の働きで父親を養っていたのである）。そしてついにはこの老人を病院へ入れ、これも同じく死んでしまった時、弔いまでしてやったとのことである。すべてこれらの事情は、ラスコーリニコフの運命の決定にかなりよき影響を与えたのである。前の下宿のおかみで、なくなったラスコーリニコフの許嫁（いいなずけ）の母に当る寡婦（やもめ）のザルニーツイナも、彼らがまだ五つ辻（ピャーチ・ウグロフ）の家に住まっていた当時、ラスコーリニコフがある夜中の出火に際して、もう火の回った一軒の住まいから、二人の幼い子供を救い出し、そのために火傷（やけど）までしたことを証言した。この事実は綿密にとり調べられ、多くの証人によってかなり十分に証明された。結局、一口に言えば、犯人がいさぎよく自首したことと、その他二、三の酌量すべき情状を尊重して第二級懲役を宣せられ、刑期もわずかに八年と決まったのである。

　まだ裁判の初めごろから、ラスコーリニコフの母は病気になった。で、ドゥーニャとラズーミヒンはこの裁判の間じゅう、彼女をペテルブルグから連れ出すことにした。ラズーミヒンは裁判の模様を細大もらさず正確に知ると同時に、できるだけ多くアヴドーチャ・ロマーノヴナと会えるように、ペテルブルグからほど遠からぬ鉄道沿線の一市街を選んだ。プリヘーリヤの病気は一種奇妙な神経病で、しかも全然とは言えないまでも、多少は精神錯乱の徴候を伴っていた。ドゥーニャが兄と最後の面会から帰ってみると、もう母親はすっかり病人になっており、熱に浮かされながらうわ言を言っていた。その日の晩に、彼女はラズーミヒンと相談して、母から兄のことを聞かれた場合、なんと答えたらよいか申し合せをして、ラスコーリニコフは、将来金と名声をもたらすべきある非公式の依頼を受けて、どこか遠い国境地方へ出立したという、一条の物語さえ母のために考え出したくらいである。けれども、二人の驚いたことには、プリヘーリヤはこの点について、当時ばかりかその後になっても、何一つ尋ねようとしなかった。それどころか、彼女自身も息子の急な出発について、一条の物語を作り上げているのであった。彼女は涙ながらに、ロージャが彼女のところへ暇乞（いとまご）いに来た時の模様を話した。それから彼女一人だけが、きわめて重大な秘密の事情を知っているということや、ロージャには非常に有力な敵がたくさんあるので、一時身を隠さなければならないのだということなどを、それとなしにほのめかすのであった。彼の将来の身の収まりという段になると、二、三の面白からぬ事情さえ済んでしまえば、疑いもなく華々しいものになるに相違ないと、彼女は思い込んでいるのであった。彼女はラズーミヒンをつかまえて、息子はやがてそのうちに国家的な人物になるだろう、それは彼の論文と華々しい文学的才能が、ちゃんと証拠立てていると言い張った。こ

の論文を彼女はのべつひっきりなしに読んだ。時には音読までするくらいで、それこそ抱いて寝ないばかりだった。が、それでも、現在ロージャはどこにいるかという段になると、みなが話をさけているのが見え透いていて、それだけでも疑いを呼び起こすのに十分だったが、にもかかわらず、彼女はこのことを聞こうとしなかった。で、とうとう彼らは、二、三の点に関するプリヘーリヤの奇怪な沈黙を、心配するようになった。たとえば、以前田舎の町にいた時は、かわいいロージャの手紙が少しも早く来るようにと、その希望と期待だけで生きていたのに、今は彼から手紙の来ないことを少しも哀訴しなくなってしまった。このことはもうあまりと言えばあまりに説明のできないことなので、ひどくドゥーニャを不安にした。彼女の頭にはこういう考えが浮かんだ――事にたったら、母は息子の運命に何かしら恐ろしいことを予感していて、この上もっと恐ろしいことを知らされはしないかと、いろいろ詳しく尋ねるのを恐れているのではあるまいか。いずれにもせよ、ドゥーニャは母の頭がほんとうに健全な状態でないのを、明瞭（めいりょう）に見てとったのである。

もっとも、二度ばかり母親の方から、今ロージャがどこにいるかを答えずにいられないようなぐあいに、話を持って行ったことがある。その返辞がいやでも応でも、あいまいな、うさんくさいものになってしまったとき、彼女は急に恐ろしく悲しげに気難かしく、黙りこんでしまい、それがいつまでも続いた。でとうとうドゥーニャは嘘をついたり、細工をしたりするのが難かしいのを悟って、二、三の点に関してはまったく沈黙を守った方がよいという、最後の結論に到着した。しかし、あわれな母親が何か恐ろしいことを疑っているのは、だんだん明瞭すぎるほど明瞭になってきた。それやこれやの間にドゥーニャは、最後の運命的（フェータル）な日の前夜、スヴィドリガイロフとあの恐ろしい一場を演じた後、彼女が夜中にうわ言を言ったのに母が耳を澄ましたそうだから、ことによったら、その時何か聞き分けたかもしれない、と言った兄のことばを思い出した。しばしば――時によると幾日も幾週間も、気むずかしい陰鬱（いんうつ）な沈黙と無言の涙が続いたあとで、病人はなんとなくヒステリックに元気づき、突然声に出して、息子のことや、自分の希望や将来のことなどを、ほとんどやみ間なしにしゃべり出すことがあった……彼女の想像は時とすると、きわめて奇怪なものだった。二人は彼女をなぐさめて、一生懸命にあいづちを打った。彼女自身もおそらくは、二人がただ気休めに、あいづちをうっているにすぎないのを、はっきり知っていたかもしれないが、彼女はやっぱり話し続けた……

犯人の自首から五か月たって、判決がくだった。ラズーミヒンはできうる限り牢内で彼と面会した。ソーニャも同様だった。ついに別離の時が来た。ドゥーニャは兄に向かって、この別離は永久のものでないと誓った。ラズーミヒンも同様である。ラズーミヒンの若々しく熱しやすい頭には、この三、四年の間にできる限り、せめて将来の地位の基礎だけでも作り、いくらかなり貯えをした上、あらゆる点において土地が豊穣で、働き手と資本

の少ないシベリアへ移住しようという計画が堅く根を張っていた。そこでロージャのいる町に居を定め、そして……みんな一緒に、新しい生活を始めようというのである。別れぎわには誰もかれも泣いた。ラスコーリニコフは最後の三、四日間、非常に考え込んでしまって、いろいろ母親のことを根ほり葉ほり尋ね、たえず彼女の上を心配していた。あまり心配ばかりするので、ドゥーニャが不安を感じ始めたほどであった。母の病的な気分について詳しいてん末を聞いてから、彼はいっそう憂鬱になった。ソーニャとはなぜかずうっと、特に口数が少なかった。ソーニャはスヴィドリガイロフが残してくれた金で、もうとっくにすっかりしたくをすまし、やがて彼の交じって行く囚徒の隊について、出かけて行く心構えをしていた。このことは彼女もラスコーリニコフも、まだたがいに一度も話し合ったことがなかったけれど、そうなるに違いないのは二人とも承知していた。いよいよ最後の別れの時、妹とラズーミヒンが出獄後の幸福な未来を熱心に誓ったとき、彼は奇怪な微笑を漏らしながら、母の病的な状態が近く不幸に終わるだろうと予言した。彼とソーニャはついに出発した。

二か月の後に、ドゥーネチカはラズーミヒンと結婚した。結婚式はわびしい、しんみりしたものだった。もっとも、招待された人々の中には、ポルフィーリイとゾシーモフが交じっていた。最近ずっとラズーミヒンは堅く決意した人らしい様子をしていていた。ドゥーニャは、彼がいっさいの意図を実現するに相違ないと盲目的に信じ切っていた。また信じないではいられなかった。この男には鉄のごとき意志が見えていたからである。さまざまな事のある間にも、彼は大学を完全に卒業するため、また講義を聞きに通学を始めた。二人はたえず未来の計画を立てていた。五年後にはかならずシベリアへ移住しようと、二人ながら堅く決心していた。それまでは向こうにいるソーニャに望みをかけていたのである……

プリヘーリヤは喜んで娘を祝福し、ラズーミヒンとの結婚を許した。しかしこの結婚後はなんだかいっそう沈みこんでしまい、よけい心配そうな様子になった。ラズーミヒンはちょっとの間でも母を喜ばせようと、ラスコーリニコフの学友と老衰したその父親に関する一件だの、去年ロージャが二人の幼児の命を救って、身に火傷を負ったばかりか、病気にまでなった事実を話して聞かせた。この二つの報告は、それでなくとも頭の調子の狂っているプリヘーリヤを歓喜のあまりほとんど有頂天にしてしまった。彼女はのべつこの話ばかりして、町へ出てまで人をつかまえて、その話を始めるのであった（もっともいつもドゥーニャが傍についてはいたけれど）。乗合馬車の中でも店屋でも、誰でもかまわず聞き手をつかまえて、自分の息子のこと、その論文のこと、学友を援助したこと、火事で負傷をしたことなどに話を向けるのであった。ドゥーネチカはどうして母を止めたらいいかと、とほうにくれるほどであった。こうして病的に興奮した気分そのものの危険もさることながら、その上にまだ、誰かがいつか裁判事件で有名になったラスコーリ

ニコフの姓を思い出して、それを言い出さぬとも限らないので、その方の心配があったのである。プリヘーリヤは、火の中から救い出された幼児の母親の住所までも聞き出して、ぜひとも彼女を訪ねたいと言い出した。そのうちにとうとう彼女の不安は極度に激しくなった。彼女はどうかするとふいに泣き出したり、しょっちゅう病みついては、熱に浮かされてうわ言を言ったりした。ある朝、彼女はいきなり真正面から、自分の勘定によると、ロージャはもう間もなく帰って来るはずだ、あの子はわたしと別れて行く時に、九か月たったら帰るものと思ってくれと、自分で言ったのを覚えている、とこう言明した。それから始終うちの中を片づけて、わが子を迎える準備を始め、ロージャのものと決めた部屋（つまり自分自身の居間）の飾りにとりかかり、家具を清めたり、窓掛けを洗ったり掛けかえたりするのであった。ドゥーニャは心を痛めたが、なんにも言わないで、自分でも兄を迎えるために、部屋の片づけを手伝った。たえまのない空想と、よろこばしい夢と、涙の中に不安な一日を送った後で、彼女はその夜発病したが、翌朝はもう熱が高くなり、うわ言ばかり言うようになっていた。熱病が始まったのである。こうして、二週間後に彼女は死んでしまった。うわ言の間に彼女の口から漏れたことばによると、彼女ははたで想像していたよりもずっと深く、わが子の恐ろしい運命について疑念をいだいたものと断定することができた。

ラスコーリニコフは長い間母の死を知らなかった――もっとも、彼がシベリアに落ち着いたその時から、ペテルブルグとの通信は規則的に行なわれていた。通信はソーニャを通してつづけられていたのである。彼女は毎月きちょうめんに、ラズーミヒンへあててペテルブルグへ手紙を送り、そして毎月きちょうめんにペテルブルグから返事を受け取った。ソーニャの手紙は初めのうちドゥーニャやラズーミヒンの目から見てなんとなくそっけなく、物足らぬように感じられたが、後になって彼らは二人とも、それ以上うまく書くのは不可能だと悟った。なぜなら、彼らは結局それらの手紙のおかげで、不幸な兄の運命についてこの上なく充実した、正確な観念を持つことができたからである。ソーニャの手紙はきわめて平凡な日常茶飯事と、ラスコーリニコフの獄中生活の環境に関する、いたって平凡明瞭な叙述にみたされていた。そこには彼女自身の希望の表明も、未来に対する想像も、自分自身の感情の発露もなかった。彼の精神状態とか、全体にその内面生活とか、そういうものを説明する代わりに、単なる事実の報告があるばかりだった。つまり、彼の言ったことばだとか、彼の健康状態に関する詳細な報告だとか、いついつの面会の時に彼がどういうものを望んだとか、彼女に何を頼んだとか、どういうことを委任したとか、そういった風のことである。しかも、これらの報告はすべて精密をきわめているので、結局、不幸な兄の面影が自然と浮き彫りになってき、正確明瞭に描き出された。そこには間違いなどのあろうはずがない。なぜなら、すべてが正確な事実だったからである。

しかし、ドゥーニャとその夫はこれらの報告から、ことに最初の間は、あまり多くの喜びをくみとれなかった。ソーニャはたえず、彼がいつも気むずかしく、ことば数の少ないことを報じてきた。ペテルブルグから手紙を受けとるたびに、ソーニャがいろいろの報告を伝えてやっても、彼は少しも興味を持たないとのことであった。時に母親のことをたずねていたけれど、もうほぼ真相を察しているだろうと思ってソーニャがついに母の死を告げた時、驚いたことには、彼は母親の訃報にさえ大して動かされた様子はなかった。少なくとも、外面から判断するとそう思われたとのことである。とりわけソーニャの報知によると、彼は見たところ深く自分自身に沈潜して、まるでいっさいのものから自己を遮蔽しているように見えるが、それにもかかわらず――自分の新しい生活に対しては、きわめて率直自然な態度をとっていた。彼は自分の境遇をはっきり了解して、近い将来に何一つよき変化を期待もせず、いっさい軽率な希望をいだこうともしないで（これは彼の境遇として当然なことであるが）、以前とは似ても似つかぬ新しい環境にとり巻かれたまま、ほとんど何事にも驚く様子がないのであった。またソーニャは彼の健康に少しも気づかいのない旨を報じた。彼は黙々と労役に出かけて行って、別段それをさける様子もないけれど、さりとて進んでしたがる様子もない。食物に対してはほとんど無関心であるが、この食物というのが日曜祭日以外は、いかにもひどいものなので、とうとう彼も進んで彼女――ソーニャからいくらかの金を受けとり、毎日きまって茶を飲むことにしたほどである。しかしそれ以外のことでは、あまり自分のためにそういろいろ心配してもらうといらいらするばかりだから、いっさいかまわないでほしいと堅くソーニャに断わった。それからなお彼女の報知によると、獄内における彼の監房は、みんなと共同だとのことであった。彼女は獄舎の内部を見たことはないが、そこは狭くてきたなくて、健康にわるいと断言している。彼は毛布を敷いて寝板の上にねむるのだが、それ以外にはどういう設備も望んでいない。けれど、彼がこんな粗末な、貧しい生活に甘んじているのは、けっしてあらかじめ考えた計画や意図によるのではなく、ただただ自分の運命に対する外面的な無関心と、不注意からきているにすぎない。ソーニャはまたつぎのようなことを知らせてきた。彼はことに初めの間、彼女の訪問を喜ばないのみか、かえって彼女にいまいましそうな顔を見せ、口もろくろくきかず、ほとんど無作法なくらいの態度をとっていたが、しまいにはこの面会が彼にとって習慣、というよりほとんど要求になってきて、この頃ではもし彼女が病気でもして、二、三日訪ねることができないような時には、非常に淋しがるようになったと、あからさまに報じている。二人の面会は日曜祭日に、監獄の門ぎわか衛舎内かで行なわれる。彼はそこへ四、五分間だけ呼び出されてくるのであった。平日は労役へ出るので、彼女はそちらへ出向いて行き、時には作業場、時には煉瓦工場、時にはイルトゥイシュ河畔の小屋で会った。自身のことについては、ソーニャ

は町でいくたりの知合いや後援者ができて、仕立物などさしてもらっているが、町にはほとんど気のきいた婦人服屋がいないので、方々の家でなくてかなわぬ人間になった、というようなことを報じた。ただ彼女のおかげで、ラスコーリニコフが長官の保護を受け、労役なども軽減されている、などというようなことだけは筆にしなかった。やがて最後に（もっとも、ドゥーニャは彼女から受けとった最近の二、三通に何か一種特別な動揺と不安さえ認めていたが）、彼がいっさい人をさけるようにするので、獄内でも囚人たちが彼をきらうようになったし、彼自身も幾日も幾日も黙りこんでいるので、非常に顔色が悪くなっていく、という報告がとどいた。そのうちに突然ソーニャは最後の一通で、彼は非常な重患にかかり、監獄病院にはいっていると知らせてよこした。

二

彼はもう久しくわずらっていた。しかし、彼の力をくじいたものは、牢獄生活の恐怖でも、労役でも、食物でも、剃り落とされた頭でも、つぎはぎだらけの着物でもなかった――ああ！　彼にとってこれしきの苦痛や呵責がなんであろう！　それどころか、彼はむしろ労役を喜んでいるくらいだった。労働で肉体的に苦しんだとき、彼は少なくとも安眠の数時間を獲得できるのであった。また彼にとって食物――たとえば、あの油虫のはいった実のない汁がなんだろう！　学生時代の以前の生活では、それすら手にはいらないことがたびたびあった。着物は暖かくて、彼の生活様式に適当していた。足かせなど彼はまるで感じないくらいだった。剃り落とした頭や印のついた上着などを彼として恥ずかしがる筋がどこにあろう？　また誰に対して？　ソーニャに対してか？　ソーニャは彼を恐れているのに、その彼女に対して恥じるわけがないではないか！

ではなんだろう？　彼はソーニャに対してさえも身を恥じて、そのために侮蔑にみちた粗暴な態度で彼女を苦しめたのである。しかし、彼が恥じたのは剃り落とした頭でも、足かせでもなかった。彼の自負心が極度に傷つけられたゆえである。彼が病気になったのも、この傷つけられた自負心のためであった。ああ、もし彼が自ら罰することができたら、どんなに幸福だったろう！　そう

したら彼は恥でも屈辱でも、いっさいのものを堪え忍んだはずである。ところが、彼は峻厳に自己を裁いてみたけれど、猛り狂った彼の良心は、誰にでもありがちの単なる失敗を除いては、自分の過去にかくべつ恐るべき罪を見出さなかった。彼が恥じたのはほかでもない。彼ラスコーリニコフが盲目な運命の判決によって、かくまで盲目愚劣に、むざむざとなんの希望もなく身をほろぼし、もし多少とも心を落ち着けたいと思えば、得体のしれぬ判決の『無意味さ』と妥協し、その前に屈服せねばならぬということなのである。

現在においては、対象もなければ目的もない不安、未来においては、何ものをも与えない不断の犠牲――これがこの世で彼を待っているいっさいである。八年たっても彼はまだやっと三十二で、また生活を新規まき直しにすることができるといったって、いったいそれになんの意味があろう！　なんのために生きていくのだ？　何を目標におくのだ？　何に向かって突進するのだ？　存在せんがために生きていくのか？　しかし、彼はもう以前から百ぺんも千べんも、思想のため希望のために、いやそれどころか空想のためにすら、自己の存在を投げだす覚悟をしていたのではないか。単なる存在そのものは、彼にとって常に多くの意義を持たなかった。彼は常々より多くのものを欲していた。おそらく彼は単に自分の欲求の力のみで、あの当時、他人に比べてより多くのものを許された人間と、自ら思いこんでいたのかもしれない。

もし運命が彼に悔恨を送ったら！　心の臓を打ちくだき眠りを奪う焼けつくような悔恨、その恐ろしい苦痛に堪えかねて、縊死や入水さえ心に描かずにはいられないような悔恨を、もし運命が送ったら！　おお、彼はそれをいかばかり喜んだかしれない！　苦痛と涙も要するにやはり生活ではないか。けれど彼は自分の犯罪を悔いなかったのである。

少なくとも、われとわが愚劣さに憤懣を感じることができたら、どんなに楽だったろう。以前彼は自分を囹圄の人としたおのれの醜悪愚劣をきわめた行為に憤懣を感じたものであるが、しかし今は、もう牢獄の中にありながら自由になってしまった彼は、自分の過去の行為をもう一度残りなく吟味し、熟考してみたのであるが、かつて運命的な瞬間に感じられたほど、それほど醜悪愚劣なものとは、なんとしても考えられなかった。

『どういうわけで』と彼は考えた。『いったいどういうわけでおれの思想は、開闢以来この世にうようよして、たがいにぶっつかりあっているほかの思想や理論にくらべて、より愚劣だったというのだ？　完全に独立不羈な、日常茶飯事の影響から離脱した、広範な見方で事態を観察しさえすれば、その時はもちろんおれの思想も、けっしてそれほど……奇怪でなくなってくるのだ。おお、五カペイカ銀貨ほどの値打ちしかない否定者や賢人たち、なぜ君らは中途半端なところで立ちどまるのだ！』

『いったいどういうわけで彼らの目には、おれの行為がそれほどみにくく思われるのだろう？』と彼はひとりごちた。『それが悪事だからというのか？　しかし、悪事

とは何を意味するのだろう？　おれの良心は穏かなものだ。もちろん、刑法上の犯罪は行なった。もちろん、法の条項がおかされ、血が流されたにちがいない。では、法律の条項に照らして、おれの頭をはねるがいい……それでたくさんなのだ！　もちろんそうすれば、権力を継承したのではなくて、自らそれを掌握した多くの人類の恩恵者は、各々その第一歩からして、罰せられなければならなかったはずだ。しかし、それらの人々は自己の歩みを持ちこたえたがゆえに、したがって彼らは正しいのだ。ところが、おれは持ちこたえられなかった。したがって、おれはこの第一歩をおのれに許す権利がなかったのだ』

つまりこの一点だけに、彼は自分の犯罪を認めた。持ちこたえられないで自首したという、ただその点だけなのである。

彼はまたこういう思念にも苦しめられた――なぜ自分はあの時自殺しなかったのか？　なぜあの時川のほとりに立ちながら、自首の方を選んだのか？　いったいこの生きんとする願望の中には、かばかりの力がこもっていて、それを征服するのがかくも困難だったのであろうか？　あの死を恐れていたスヴィドリガイロフでさえ、それを征服したではないか？

彼は悩ましい思いをいだきながら、始終この問いを自分自身に発したが、もうあの時川のほとりに立ちながら、自分自身の中にも自分の確信の中にも、深い虚偽を予感していたかもしれないのを、彼は了解することができなかった。またこの予感が彼の生涯における未来の転機、未来の復活、未来の新しき人生観の先駆だったかもしれないのを、彼は悟ることができなかったのである。

彼はむしろそこにただ本能の鈍い重圧のみを許容しようとした。彼はそれを引きちぎることもできなければ、またそれを踏み越えて行こうという力も、やはりなかったのである（つまり無力で意気地がないためである）。彼は獄中の仲間を見て、彼らが誰も彼も人並みに人生を愛し、かつ尊重しているのに一驚を喫した！　まったく彼の感じたところによると、彼らは獄中にいる時の方が自由な時よりも、はるかに人生を愛し、尊重しているのであった。彼らの中のあるもの、たとえば浮浪漢などは、どんな恐ろしい苦痛や拷問を経験したかわからない。それにもかかわらず、たった一筋の太陽の光線や、蓊鬱（おうつ）たる森林や、どこともしれぬ森の奥にたまたまみつけた冷たい泉などが、どうして彼らにあれほどの意味を持ちうるのだろう？　たとえば、その泉を見つけたのはもう一昨年のことなのだが、浮浪漢はそれに再びめぐり合うのを、まるで恋人と逢引でもするように空想して、夢にまでその泉や、それをとり巻く緑の草や、木叢（こむら）にうたう小鳥などを見るほどである。じっと周囲の現象に見入れば見入るほど、彼はますますこうした説明のできぬ実例を無数に発見するのであった。

彼は牢獄内や、自分をとり巻いている周囲の中に、もちろん、多くのものを認めなかったし、また頭から認めようともしなかった。彼は、いわば目を伏せたような風

に生活していた。彼としては見るのがいまわしく、堪えがたいのであった。しかしだんだんそのうちに、色々なことが彼を驚かすようになった。彼はいつともなく、以前ゆめにも考えてみなかったことに、気がつくようになった。概して何より彼を驚かし始めたのは、彼自身とそれらすべての人々の間に横たわっている、かの恐ろしい越え難い深淵であった。彼と彼らはまるで違った人種のようだった。彼と彼らはたがいに不信と、敵意の目で見合っていた。彼はこうした乖離の一般的な原因を知ってもいたし、また悟ってもいた。しかし以前はかつて一度も、この原因が実際かくまで根深く力強いものとは、仮想さえもしたことがなかった。獄内にはやはり流刑の国事犯であるポーランド人もいた。彼らはこうした人々全体を、単に無教育な奴隷扱いにして、頭から軽蔑していた。けれど、ラスコーリニコフはそんな見方ができなかった。彼はこれら無教育者が多くの点から見て、むしろ当のポーランド人たちよりもはるかに賢明なのを、明らかに見てとったのである。そこにはまた同様に、これらの人々を軽蔑し切っているロシア人もいた。それは一人の将校あがりと二人の神学生であった。ラスコーリニコフは彼らの誤謬をも、明瞭に認めたのである。

彼自身はどうかというと、一同は彼をきらって、さけるようにしていた。のみならず、ついには憎むようにさえなった――なぜだろう？　彼はそれを知らなかった。一同は彼を軽蔑し、彼を嘲笑した。彼よりもずっと罪の重い犯人が、彼の犯罪を嘲笑するのであった。

「お前は旦那衆じゃないか！」と彼らは言った。「お前は斧なんか持って歩く柄かね。そんなのは旦那衆のするこっちゃねえよ」

大斎期の二週間目に、彼は同房の一同と共に精進する番になった。彼は教会へ行って、ほかのものと一緒に祈った。ある時何が原因だったか、彼自身にもわからなかったが――喧嘩が持ち上がった。一同はものすごい勢いで、一度に彼に襲いかかった。

「この不信心者め！　手前は神さまを信じねえんだ！」と彼らは叫んだ。「手前なんかぶち殺してやらなきゃならねえ野郎だ！」

彼は一度も神や信仰の話をしたことはなかったが、彼らは無神者として彼を殺そうとしたのである。彼は沈黙を守って、ことばを返そうとしなかった。一人の囚人はもうすっかり夢中になってしまい、彼に飛びかかろうとした。ラスコーリニコフは落ち着き払って、無言のまま待ち受けていた。彼は眉ひとつ動かしもせず、顔面筋肉一本の震えも見せなかった。おりよく看守が彼と乱暴者の間へ飛びこんだが、さもなかったら、血を流さねばやまないところだった。

彼にとってはまだ一つ、解決し難い問題があった。ほかでもない、なぜ彼らが一人のこらずソーニャを愛するようになったか、ということである。彼女は別に彼らのきげんをとるでもなかったし、また彼らもたまにしか彼女を見なかった。彼女はただ時おり一同の仕事場へ、彼に会うために、ほんのちょっとやってくるばかりであっ

た。にもかかわらず、一同は彼女を知っていた。彼女が彼のあとを追って来たことも、彼女がどこでどう暮らしているかということも、ちゃんと知っていた。ソーニャは彼らに金を恵んだこともなければ、かくべつこれという世話を焼いてやったこともなかった。ただ一度クリスマスの時、獄の囚人全部に、肉まんじゅうと丸パンを贈っただけである。けれど、彼らとソーニャの間には、しだいに一種の近しい関係が結ばれていった。彼女は彼らのために、身内の者へ送る手紙を書いてやったり、それを郵便で出してやったりした。この街へやってきた彼らの親戚は、彼ら自身の指定に従って彼らに贈る品物ばかりか金までも、ソーニャの手に残して行った。彼らの妻や情婦たちも彼女を知って、彼女のところへやってきた。彼女がラスコーリニコフを訪ねて仕事場へ姿を現わした時とか、労役に行く囚徒の一隊と道で出会った時などは――みんな帽子をぬいで彼女におじぎをした。「ああ、ソフィヤ・セミョーノヴナ、おまえはおれたちのおふくろがわりだよ。やさしい思いやりの深いおふくろだよ！」これらの荒くれた刻印つきの懲役人たちが、このちっぽけなやせこけた女に向かってこんな風に声をかけるのであった。彼女はにっこり笑いながら、会釈を返した。彼らはみんな彼女の笑顔が好きだった。その歩きぶりまでが好きだった。誰もかれもが、彼女の歩いて行く姿を見送るために、わざわざふり返って彼女をほめそやした。彼女があんな風に小柄なことをまでほめそやして、しまいには何をほめたらいいかわからないくらいだった。中には彼女のところへ、病気を直してもらいに行くものさえあった。

彼は大斎期の終わりと復活祭の一週間全部を、ずっと病院に寝てすごした。もうそろそろ回復期に向かったころ、彼はまだ熱に浮かされてうわ言ばかり言っていた時分の夢をふと思い起こした。彼は病気の間にこんな夢を見たのである。アジアの奥地からヨーロッパへ向けて進む一種の恐ろしい、かつて聞いたことも見たこともないような伝染病のために、全世界が犠牲に捧げられねばならぬこととなった。いくたりかのきわめて少数な選ばれたる人々を除いて、人類はことごとく滅びなければならなかった。それは人間の肉体に食い入る一種の新しい微生物、旋毛虫が現われたのである。ところがこの生物は、理性と意志を賦与（ふよ）された精霊だった。で、それにとりつかれた人々は、たちまち憑（つ）きものがしたようになり、発狂するのであった。しかし、人間は今まであとにも先にも、これらの伝染病患者ほど自分をかしこい、不動の真理を把握したもののように考えたことは、かつてないのであった。彼らほど自分の判決や、学術上の結論や、道徳上の確信や信仰などを、動かすべからざる真理と考えたものは、またとためしがないほどである。人々は村を挙げ、町を挙げ、国民全部をこぞって、それに感染し、発狂してゆくのであった。誰もかれも不安な心持に閉ざされて、たがいに理解しあうということもなく、めいめい自分一人にだけ真理が含まれているように考え、他人を見ては煩悶（はんもん）し、われとわが胸をたたいたり、手をもみ

しだいたりしながら泣くのであった。誰をどう裁いていいかもわからなければ、何を悪とし、何を善とすべきかの問題についても意見の一致というものがなかった。また誰を有罪とし、誰を無罪とすべきかも知らなかった。人々は何かしら意味もない憎悪にとらわれて、たがいに殺しあった。たがいをほろぼし合うために大軍をなして集まったが、軍隊はもう行軍の途中で、突然自己殺戮(さつりく)をはじめた。列伍(れつご)は乱れ、兵士はたがいにおどりかかって、突きあったり、斬りあったり、噛みあったり、食いあったりした。町々ではついに警鐘を鳴らして、人を呼び集めたが、誰がなんのために呼んでいるのか、それを知るものは一人もなかった。一同はただ不安に包まれていた。ありふれた日常の仕事は放擲(ほうてき)されてしまった。てんでに思い思いの意見や善後策を持ち出すけれど、一致を見ることができないからであった。農業も中止された。人々はここにひとかたまり、あちらにひとかたまりとかけ集まって、何かの決議をした上、けっしてわかれまいと誓った――けれどたちまちのうちに、たったいま自分たちで予定したのとは、まるで反対なことをやりだして、たがいに相手を責めながら、つかみ合い斬り合いを始めるのであった。火災が起こり飢饉(ききん)が始まった。何もかも、ありとあらゆるものが滅びていった。疫病はしだいに猖獗(しょうけつ)を加え、ますます蔓延(まんえん)していった。世界じゅうでこの厄をのがれたのは、ようやく四、五人にすぎなかった。それは新しき人の族と新しき生活を創造し、地上を更新し浄化すべき使命を帯びた、選ばれたる純なる人々であった、しかし誰一人として、どこにもそれらの人を見たものもなければ、彼らのことばや声を聞いたものもなかった。

この無意味なうわ言が、彼の記憶にかくもうら淋(さび)しく、かくも悩ましく反響をつづけ、この熱に浮かされた夢の印象が、かくも長く消えようとしないのが、ラスコーリニコフを苦しめるのであった。それはもう復活祭後の第二週間目だった。あたたかく明るい春らしい日がつづいた。監獄病院でも窓が開かれた（それは格子づくりになっていて、下を歩哨(ほしょう)が歩いていた）。ソーニャは彼の病ちゅうたった二度しか、病院へ見舞に来られなかった、そのたびに許可を得なければならなかった上に、それが容易でなかったからである。けれど彼女はしょっちゅう（ことに夕方）、病院の庭へ来て、病室の窓の下に立った。また時には、ほんのちょっとのま庭に立って、せめて遠くからでも病室の窓を見るために、わざわざやって来ることもあった。ある日の夕方、もうほとんど全快していたラスコーリニコフは、一寝入りして目をさますと、何気なく窓に近寄った。と、はるか病院の門のそばに、ソーニャの姿をみとめた。彼女はじっと立って、何か待っているような風情であった。この瞬間、何かが、彼の心臓をぐさっと刺したような気がした。彼はぴくりと身震いし、急いで窓のそばをはなれた。翌日ソーニャは来なかった。三日めも同様だった。彼は不安をいだきながら彼女を待っている自分に気づいた。やがて彼は退院した。監獄へ帰って囚人仲間から聞いてみると、ソフィヤ

・セミョーノヴナは病気して家にこもったきり、どこへも出ないでいるとのことだった。

彼は一方(ひとかた)ならず心配して、彼女の容体を聞きに人をやった。やがてまもなく、彼女の病気は危険なものでないとしれた。ソーニャはソーニャで、彼がそんなにまで自分を恋しがり、心配しているのを知ると、鉛筆で走り書きの手紙をよこして、もう体はたいへんよくなった。病気はただちょっとした感冒なのだから、近いうちに、ごく近いうちに仕事場の方へ会いに行く、と前ぶれした。この手紙を読んだ時、彼の心臓は痛いほど鼓動した。

それはまたよく晴れたあたたかい日であった。早朝六時ごろに、彼は河岸の仕事場へ出かけて行った。そこには一軒の小屋があって、雪花石膏(せっこう)を焼くかまどの設備があり、そこで焼いた石をつくのであった。みなで三人の働手がそこへ出かけた。囚徒の一人は看守について、何かの道具をとりに要塞(ようさい)へ行った。いま一人はたきぎをこしらえて、それをかまどの中に積み始めた。ラスコーリニコフは小屋から川岸っぷちへ行って、小屋の傍に積んである丸太に腰をおろし、荒涼とした広い大河をながめ始めた。高い岸からはひろびろとした周囲の眺望がひらけた。遠い向こう岸の方から、かすかな歌声が伝わってきた。そこには日光のみなぎった目もとどかぬ草原の上に、遊牧民の天幕が、ようやくそれと見分けられるほどの点をなして、ぽつぽつと黒く見えていた。そこには自由があった。そして、ここの人々とは似ても似つかぬ、まるで違った人間が生活しているのだ。そこでは、時そのものまでが歩みを止めて、さながらアブラハムとその牧群の時代が、まだ過ぎ去っていないかのようであった。ラスコーリニコフは腰をおろしたまま、目も放さずにじっとみつめていた。彼の思いは夢のような空想と、深い黙思に移っていった。彼はなんにも考えなかったが、なんともしれぬ憂愁が彼を興奮させ、悩ますのであった。

突然、彼の傍へソーニャが現われた。ほとんど足音も立てずに近寄ると、彼と並んで腰をおろした。時刻はよほど早かった。朝寒(あさざむ)はまだやわらいでいなかった。彼女は例の貧しげな古い外套(ブルヌース)を着て、緑色のきれを頭からかぶっていた。その顔はまだ病気の名残りをとどめて、やせて青白く、頬がげっそりこけていた。彼女はよろこばしげに愛想よく、にっこり彼にほほえみかけたが、いつものくせで、おずおずと手を差し伸べた。

彼女はいつもおずおずと彼に手を差し伸べるのであった。時によると、おしのけられはしないかと恐れるように、まるで出さないことさえあった。いつも彼はさもいやらしそうにその手をとり、なんだかいまいましいという様子で彼女を迎えた。時によると、彼女が訪ねてきている間じゅう、かたくなに口をつぐんでいることもあった。で、彼女は男の気をかねてちりちりしながら、深い悲しみをいだいて帰るのであった。ところが、今は二人の手は離れなかった。彼はちらとすばやく彼女を見ただけで、なんにも言わずに目を伏せた。彼らは二人きりだった。誰も彼らを見るものはなかった。看守はちょうどこの時向こうをむいたのである。

どうしてそんなことができたか、彼は自身ながらわからなかったけれど、ふいに何ものかが彼をひっつかんで、彼女のもとへ投げつけたようなぐあいだった。彼は泣いて、彼女の膝を抱きしめた。はじめの一瞬間、彼女はすっかりおびえ上がって、顔はさながら死人のようになってしまった。彼女はその場からおどり上がり、わなわな震えながら彼をみつめた。けれどすぐその瞬間に、彼女は何もかも悟った。彼女の目の中には無限の幸福がひらめいた。彼女は悟った。男が自分を愛している、しかも限りなく愛しているということは、彼女にとってもうなんの疑いもなかった。ついにこの瞬間が到来したのである……

彼らは口をきこうと思ったけれど、それができなかった。二人の目には涙が浮かんでいた。彼らは二人とも青白くやせていた。しかし、この病み疲れた青白い顔には、新生活に向かう近き未来の更生、完全な復活の曙光が、もはや輝いているのであった。愛が彼らを復活させたのである。二人の心はお互い同士にとって、生の絶えざる泉を蔵していた。

彼らは隠忍して、待とうと決心した。彼らにはまだ七年の歳月が残っていた。それまでにはいかばかり堪えがたい苦痛と、限りなき幸福があるかしれない！　けれども、彼はよみがえった。そして自分でもそれを知っていた。自分の更生した全存在で、それを完全に感じたのである。そして彼女は――彼女はもとよりただ彼の生活のみで生きていたのだ！

その日の夕方、はや監獄もしまった時、ラスコーリニコフは寝板の上で横になって、彼女のことを考えていた。この日は、かつて彼の敵であった囚人たち一同が、もう別な目で彼を見ているような気がした。彼は自分の方から進んで、彼らに話しかけたくらいである。すると、向こうでも優しくそれに答える。彼は今それを思い出した。しかし、それは当然そうなくてはならなかったのだ。今すべてが一変してはならぬという法はないではないか？

彼は彼女のことを考えた。自分がたえず彼女を苦しめ、彼女の心をさいなんでいたことを思い出した。彼女の青白いやせた顔を思い浮かべた。が、今ではこれらの思い出も、ほとんど彼を苦しめなかった。これからどんなに限りない愛をもって彼女のいっさいの苦痛をあがなうかを、自分で知っていたからである。

それに、こうしたいっさいの、いっさいの過去の苦痛とははたしてなんであるか！　今となってみると何もかも――彼の犯罪、宣告、徒刑さえも、この感激の突発にまぎれて、何かしら外面的な奇怪事のような、まるで人の身の上に起こったことのような気がした。とはいえ、彼はこの夕べ何ごとによらず長くみっちり考えたり、思想を集中させたりすることができなかった。いま彼は何ごとにもせよ、意識的に解決することができなかったに相違ない。彼はただ感じたばかりである。弁証の代わりに生活が到来したのだ。したがって意識の中にも、何かまったく別なものが形成されるはずである。

彼の枕の下には福音書があった。彼は機械的にそれを

とりあげた。この書物は彼女のもので、かつて彼にラザロの復活を読んで聞かせた、あの本である。彼は徒刑の初めころ、彼女が宗教談で自分を悩まし、うるさく福音を説いて、書物を押しつけるだろうと思っていた。ところが、驚き入ったことには、彼女は一度もそのような話をしないどころか、まるで福音書をすすめようとさえしなかった。とうとう彼は病気になるちょっと前に、自分から彼女に持って来てくれと頼んだ。彼女は何も言わずに本を持ってきた。しかしこの時まで、彼はそれをあけて見ようともしなかったのである。

彼はその日もそれを開かなかった、けれど、ある一つの想念が彼の頭にひらめいた。『今となったら、もう彼女の確信は同時におれの確信ではないか？　少なくとも、彼女の感情、彼女の意欲ぐらいは……』

彼女もやはりこの日いちんち興奮していたが、夜になってからまたまた病気になってしまった。けれど彼女は幸福だった、あまり思いがけなく幸福だったので、自分の幸福にほとんど恐れおびえたほどである。七年、たった七年！　こうした幸福の初めのあいだ、彼らはどうかした瞬間に、この七年を七日とみなすほどの心持になった。彼は、この新生活が無報酬で得られたのではなく、まだまだ高い価を支払ってそれを買いとらねばならぬ、そのためにはゆくゆく偉大な苦行で支払いをせねばならぬ、ということさえ考えないほどだった。

しかし、そこにはもう新しい物語が始まっている――一人の人間が徐々に更新してゆく物語、徐々に更生して、一つの世界から他の世界へ移ってゆき、今までまったく知らなかった新しい現実を知る物語が、始まりかかっていたのである。これはゆうに新しき物語の主題となりうるものであるが、しかし本篇のこの物語はこれでひとまず終わった。